

# 萬葉語と琉球語

伊波普猷

はしが

島津氏の琉球入後、間もなく世に出た、琉球の經世家羽地王子向象賢は、其の仕置の中に「竊惟者、此國人生初は、日本より爲渡儀疑無御座候。然者末世之今に、天地山川五形五倫鳥獸草木の名に至迄皆通達せり。雖然言葉の餘相違者、遠國之上久敷通融爲絶故也。五穀も人同時日本より爲渡物なれば、云々」と言つてゐる。彼は言語の類似から琉球人の祖先が日本から渡つた、といふ事を思付いた最初の人で、その説は、明治の初年に至つて、琉球最後の政治家宜灣朝保によつて布行された。宜灣は位よあすたべ（法司ともいふ、大臣のこと）に上つた人で、松風齋と號し、和漢の學に通じてゐたが、ことに和歌は八田知紀の門下でも錚々の名があつたといはれてゐる。政務の餘暇に『琉語解釋』を物し、古事記傳萬葉集などを見るに、日本上古のことば爰には今も多く残り」といつて、三十餘の單語を記紀萬葉中の古語と比較對照してゐるが、この語彙にはイロハのみだしをおいて、皆餘白が存してゐるから、稿本の中でも着手始めのものであつたことが知れる。

私もこれらの古語と縁故のある琉球語をよりくあつめて、比較對照を試みてゐるが、平安朝から鎌倉室町の二期にかけての國語も、かなり輸入されてゐるのを見て、琉球語が國語三千年の歴史の横断面であることを、今更のやうに感じてゐる。

最近、萬葉集中のものに類似のもの、約百五十餘語を拾ひ出したから、左にこれを比較對照することにしよう。

あ、あん

山田孝雄博士は、『奈良朝文法史』中に、吾は「わ」「われ」といつたのは、萬葉期以後のことで、この期以前には「あ」「あれ」で、琉球語の第一稱も亦「わ」であるのを見ると、「あ」の古形は日本・琉球兩國語の祖語にあつた筈だから、琉球語は完全に「わ」の勢力の成立した時期に分立したのではないか、と言はれたが、「あ」は琉球の神歌オモロ及び宮古島の古謡アヤゴ中に見出され、現に沖繩島の北部の方言中にも見出されるから、琉球語分立の時期は、もつと溯らなければならぬやうな氣がする。推古朝に南島人が來朝した時、譯語（ワカ）を置いたところから考へても、當時は分立してから可なりの年數を經過してゐたと見なければなるまい。なほ又それは音韻變遷の方面からも垣間見ることが出来る。即ち、PからFへ、そしてFからHへと、國語がこの三千年間に進んだものが、現在南島に縮寫されてゐるのを見ても頷かれよう。これについては、先達而山田博士にはじめてお目にかゝつた時、お知らせするの光榮を得た。

「あ」「あん」が古形で、「わ」「わん」がそれから分化したことは、文献に徴しても明かで、明の永樂の初頃、支那人に

よつて採録された琉球館譯語(華夷譯語の一)は、「我」を昂(ang)と音譯し、それから一世紀たつて、明の弘治十四年に、朝鮮人によつて編纂された語音翻譯は、之を魯(wan)と音譯してある。更に一世紀たつて、明の萬曆前後の所輯に係る篇海類編・音韻字海・海篇正宗等の琉球譯語には、これが瓦奴(わぬ、萬葉にもある)になつてゐるが、この形は、「わん」と共に、今なほ方言中に並行はれてゐる。以上は口語の場合であるが、オモロは古形を踏襲する韻文である關係上、永樂頃(十五世紀の初葉)のものもとより、弘治頃(十六世紀の初葉)のものも、又それ以後のものも、「あ」又は「あん」になつてゐる。一三三の用例を擧げて見ると、「あがおなりみ神のみまぶらでておわちやむ」(我が妹の生御魂、見、「おし出たる、ゑ、つかさご(神)、ゑ、あは祈て、帆舟る、ゑ、走り出ちへたる、ゑ」(雛子)「知花後獄に、あんは神てづら(手摺らむ即ち(祈らむの意)、神やあん守ぶれ」あがかい撫であぢおそい」の如きものである。試みに、オモロに現れた第一人稱の代名詞の統計を取つて見ると、「あ」が百十八、「あん」が九あるに對して、「わ」は八、「わん」は十二あるのみで、しかも後者は比較的新しいものに出てゐるか、さもなければ、祭祀を歌つた以外のものに出てゐる。

「あ」「あん」と「わ」「わん」とは、古くから並行はれてゐたであらう。といふのは、洪武・永樂頃支那に留學した琉球の官生等は、皆貴族の子弟であつたから、「わ」「わん」に比べて、古風な情調を有つてゐた「あ」「あん」を使つたと思はれるからだ。この二形は、恐らく南島に定住しない以前から並行はれてゐたに違ひない。さうでなければ、平安朝以後に、日本語から拜借したと見なければならなくなるが、それは一寸考へにくいことである。

それから、語音翻譯の編纂された前年に、八重山征伐があつて、其時從軍した宮古島の酋長が、人質につれて歸つた、八重山の酋長の娘の歌が、二百年前に編纂された宮古島舊記に採録されてゐるが、その中に、「漲水もあは見て、

おやざけもあは見て」と出てゐる。稍後れて、同じ宮古島の酋長が、與那國島の鬼虎を征伐した時のことを歌つた五十二句のアヤゴが、宮古島第三舊記に出てゐて、その中に、「我刀治金丸請見ろ」といふ句があるが、この「我」も「あが」と讀んだに違ひない。明治四十一年の春、宮古島を訪れた時、鬼虎の娘の歌と稱して、私の中學時代の同窓の奥さんが謡つてゐた五十七句のアヤゴを初めて採録したが、その中に「ばが八重山みやければど、ばんが家のおもかけの、前んど立ちゆれば」といふのがある。この「ば」「ばん」も、古くは「あ」「あん」であつたのが、口々に語りついでるうちに、いつしか新しい形にすけかへられたのであらう。因にいふ。宮古八重山の方言では、w は皆りに變じてゐる。この代名詞の二形が、沖繩本島同様に、兩先島でも並行はれたことは言ふまでもない。「あ」「あん」は、今では沖繩島の北方地方の方言中に遺つてゐるが、他の地方では、時偶幼稚な者が使つてゐるのを耳にするだけである。

「あ」は、いふまでもなく、代名詞の語尾の發達しない時代のものだから、複合語を作る時には、あづま(我妻)・あご(吾兒)などのやうに、領格の接尾語を俟たないで、直に接してゐる。琉球館譯語に「父親、阿舍都」とある阿も「我」であらう。オモロに「親のもとかまへ、あさがもとかまへ」(父のもと)とある「あさ」「あ」もこれであらう。「あさ」は、語音翻譯には、*o-ta (ata)* になつてゐるが、宮古の方言には、今なほこの古形が保存されてゐる。音韻字海は、「父」を、一更加烏牙(*Yi-sa-hya* 即男親の義)と音譯してあるから、「あさ」は、三百年前には、もう耳遠くなつてゐた永見て差支ない。これは八重山の方言では、轉訛して *atcha* となつてゐるが、徳之島、鬼界の兩方言では、*sa* 沖と良部・與論の兩方言では *ata* となつてゐるから、奄美大島方言にも、かつてその存在してゐたことが窺はれる。

首里の士族は母を、アヤーといつてゐて、琉球館譯語にも、母親を阿也と音譯してあるがこれが、「我親」の義で

あることは、玩歌に「旅や濱屋取り、草の葉ど枕、寝ても忘らぬ、我親の御側」とあるのでわかる。又地名に親富祖といふのがあつて、「や」に親を宛てた場合があるのでも知れる。「わ」が複合語を作る場合に、領格の接尾語を俟たないで、直に接してゐることも、これで能くわかる。玩歌には「我嫁」など用ゐた例もあるが、現今の口語では、ワロユミ(我が嫁)、ワームン(我が物)などのやうに、母音を長く引張つてゐる。

### あ か ず

この語は、萬葉集では、満足せぬ、不足などいふ物足らぬ心持ちと、極端によく、何處までも嫌にならぬといふのとの二義に使はれてゐるが、オモロでは「あかず珍らしや」見れどもあかぬ、首里親國」などのやうに、第二義に用ゐられた例はあるが、第一義で用ゐられた例は見出せない。だが、玩歌では「あかぬ別れ路や、斯すつれなさめ。朝夕面影のいつものかぬ」のやうに、第一義に使つたのと「あかぬ語らたる人の面影や、あはれことの音に、まさて立ちゆさ」のやうに、第二義に使つたのがある。

この語は、とうに死語となつて、口語では、その第一義には、アチザラン(飽きさらぬ)が使はれてゐるが、これには満足せぬ、不足などいふ物足らぬ心持ちをあらはす以外に、氣にくはないといふ言語情調が伴ふやうである。これは二重打消の形になつてゐるが、「飽き足らぬ」がアチヂャランに變じ、何かの類推でアチザランとなつたに違ひない。それから、第二義には、アチハティランが使はれてゐるが、これは「飽き果てらぬ」の轉訛したものである。

## あかとんき

琉語解釋に、「田舎などにて曉をしか云也。萬葉第二に、わがせこをやまとへやるとさよふけてあかとき露にわれたちぬれし、註に曉はアカトキと云が本語也と云り」と見えてゐる。國語では、あかときは夜のひきあけ、まだほの暗い時分の朝はやくの義を有し、後にあかつきに轉じたが、琉球語では、あかとんきに轉じ、更に akatunahi に轉じて、田舎に遺り、國語と同様の義で用ゐられてゐる。そして奄美大島諸島の方言にも atuki (△ahatuki △akatuki) 又は atunahi といふ形で遺つてゐる。あかときは、首里語では、とうの昔 akatsihin に轉じたと見えて、清の康熙五十年(今から二百二十三年前)に編纂された古語の辭書にも、見出すことが出來ず、それには「あがるいのあるのみである。序でかつきの事、てだがあなのあけもどろ、反詞、天啓三年船ゑとのおもろ御双紙に見えたり」とあるのみである。序でにいふ。あがるいは東方の義、てだがあなは太陽の穴の義である。あけもどろには、曉と注がしてあるが、あけは曉の義で、もどろは太陽が出ない前に光線を射出する状態を形容した語のやうに思はれる。あかときといふ語は、オモロには一つも出てゐないが、おもろ人は多分<sup>びん</sup>之を使つたであらう、オモロでは、曉の露を「あけのつよ」といひ、又夜あけを「ようあけ」といふから、あかときのあかが明いといふことでなく、このあけの轉であることは、折口博士がいはれた通りに違ひない。

## あかぼし

國語では、あかほし（曉星）は、曉の明星のことで、萬葉集には、あかほしのある朝、と枕詞風に用ゐてある。オモロには「ゑけ、あがる三日月や、ゑけ神ぎやかなまゆみ、ゑけ、あがるあかほしや、ゑけ、神ぎやかなまゝき」と出てゐるが、宵の明星のことであるか、曉の明星のことであるか、判然しない。八重山の方言では、曉の明星を *akapusi* といふから、恐らく後者を言つたに違ひない。この語はとうに死語となつて、今ではその代りにヨーカーが用ゐられてゐる。夜明け星の義である。之に對して、宵の明星をユーバンマンチャーといつてゐるが、それには夕飯を欲しさうに眺めてゐる星の義がある。

## あそび

小中村清矩博士は、『歌舞音楽略史』中に、書紀に「天稚彦が死うなりし時、その親族等集ひて、喪葬の式を行ひ定め、日八日、夜八夜、遊あそびたりき」と見えてゐるあそぶといふことを、管絃歌舞の樂を爲るをいつた、と解されたが、沖繩島の東海岸を少しく沖に離れた津堅島でも、一時代前までは、風葬の俗があつて、一週間ほどは毎晩のやうに、親戚朋友が、酒肴や樂器を携へて、死人を訪つれ、思ふ存分に遊あそぶのを「別れ遊び」といつてゐた。これは折口博士が

喝破された通り、單なる葬宴ではなく、かうしたら、死人が蘇生もしようか、といふ希望をもつて、踊り狂つたのが、後世その古義が忘れられて、「別れ遊び」の義に解されたに違ひない。

折口博士も、『萬葉集辭典』中に、あそぶを解して「古くは管絃の類の音楽を樂しむことになつたやうで、遊部などの部曲かきすらあつたのである。後には廣く心を慰め、霽れさせる行爲をいふ事になつたので、本集中にあるあそぶも、この兩義を持つてゐるやうである」といつて居られるが、琉球語でもやはり、この兩義に使はれてゐる。しかも「あそび」と名詞形にすると、誰でも第一義に解するのが普通である。オモロでもやはり、兩義に使はれてゐるが、九分通りは第一義に使はれてゐる。『おもろさうし』の十二の卷「いろくのあそびおもろ御さうし」は、例のあそびの時に謡はれたオモロを収めたものである。

具志堅ぐしけんのろくもいのおもり帳ちやうに出てるる、舊八月十日の御嶽御願みづたけのみねがねの折りのオモリに「我が神や、今日けふん明日あしたん、蜻蛉せみあそび、胡蝶はなあそび、あいるすんど、はいるすんど、わが神や」といふのがあるが、神と呼ばれる祝女のらが、神羽かみはを着て、神前で踊る狀さまを歌つたもので、この場合のあそびは、舞ひの義に解して差支ない。

## あたら

錯置法で、あらた(新)から轉じて、惜しく思ふ感情を表すやうになつた副詞。無駄にしたのを残念がる心地。大事に思ふ心理。もつたい無いといふ意もある。混效驗集に「あたら夜、おしき夜の事也。和詞にもいふ、あたら夜の月



と花とを同じくばあはれしれらん人にみせばや」とある。琉歌には「あたら花やすが、ませ立てることのならなしゆて朝夕風にもまち」あたら、白地に色つけて亂れそめなちやる縁のつらさ」などの用例がある。戯曲にも「あたら敵かたき討たな(ずに)いたづらに」「あたら人間に生れやり居とて」等の用例がある。これだけを見ても、あたらが萬葉集中のそれと同義に使はれてゐることがわかる。だが、現今の口語には、かうした用法はなく、あたらを語根にしたあたらしや(惜即ちあたらしの義)といふ形容がある。混效驗集にも「あたらしや、おしきと云ふ事。和詞にも通。歌に、あたらしや夷がちしまの春の花詠むる人もなくて散るらむ」とある。戯曲に「浅ましや、村原、命のあたらしやい」(浅ましいことだ、村原よ、)といふ用例がある。又、「あたらしが満納、如何しちやる事が」(惜しい満納をどう)とも見えて(命が惜しいのかの義)る。前者は口語でも使はれてゐるが、後者は戯曲でのみ用ゐられてゐる。その外、あたらから轉じて、あつたるといふ限定辭となり、「あつたる・むん」(惜しい物。大切な物)といつたやうに用ゐられるが、これは動詞の連體的の類推で出來た形に違ひない。

## か ち

徒歩。乗り物に由らずに、陸路をちかにあるくことで、今なほ盛んに使はれてゐる。例へば、徒歩で行くをカチ・カラ・イチェンといひ、さうして行ける處をカチワタイといつてゐる。かちの古い形は、くがぢ(陸地)であつたと見え、オモロには、「くがぢ歩む様に漕がせ」と出てゐる。これで、金澤博士が、かちは陸地の融合で、馬より行く、船

から行くの如く、陸地より行くといつたのを、歩みの由る所を直に歩み方の名にしたのである、といはれた説が裏書きされるやうな氣がする。

くすし

醫者のこと。混效驗集にくすし、醫師を云。和詞には藥師と云」と見えてゐるから、二三百五十年前までは、内裏言葉として使はれたことが知れる。

けもゝ

毛桃。桃の一種で、花も實も共に大きく、果には細毛が密生してゐる。今はキーム、と言つてゐる。

こら

子等<sup>こも</sup>。オモロに男等の義に使はれたのが、唯一つある。十四の卷の七に、「あさてや、たいらのまつり、ばふとりがみせらば、みちへおわれ、みかひは、さなきやのおりめ、やまとのこら、にみせたなやたる」といふオモロがある。一首

の意は、明後日は平良の祭だ、棒踊が見たければ(？)、見ていらつしやい、今日から三日目はサニキヤの節句だ、日本の男等にも見せるとよかつた(もう出帆して了つた、惜しことだ)といふことである。こゝでは、こゝらは複數になつてゐるが單數の意味でも使はれたやうな氣がする。といふのは、その音韻轉訛なる *mekwa* には、子の義があり、沖繩島の北部の方言では、老人が、なつかしがつて、若い人を呼ぶ時にも、使はれてゐるからだ、序にいふが *hōra* が *ikwa* に轉じたのは *mekwa* (言)が *mikwa* に轉じ *yunagu* (夕間暮)が *yunangwi* に訛つたのと同じ音現象である。

## こ ろ

萬葉集辭典に、こゝろは『子等』といふのと同じ事である。こゝろにはなつかしみがあつた。子ろと言つても一般的に人を指すので無くて、特定の人を指してゐるのだ。卷十四「春の野に草養ひ黒馬の口止ます吾をしぬぶらむ家の子ろはも」かの子ろと寝すやなりなむは薄うら野の山に月かたよるも。妹ろ・夫ろといふ例もある。』と見えてゐる。この語はオモロの中にも澤山出てゐるが、やはり一般的に人を指すのでなく、特定の人を指してゐる。こゝろは一語のやうになつて、そのろには萬葉語にあるやうな、なつかしみは感ぜられないが、婿ろといふのが一つ出てゐるからと同じものであるやうに思はれる。『撫でこゝろ』「いくさもいこゝろがま」(イクサモイといふ青年)等の例がある。之を複數にする時は、語尾にた(等)をつけて、こゝろたにしたり、二つ重ねてこゝろくにしたりする。又接頭のまをつけて、まこゝろた

と美稱にすることもある。混效験集に「大ころ、男の事也。こしあての大ころといふ時は夫の事也」と見えてゐるが、今も夫のことをこしやて(腰當即ち據りかゝるべき者の義)といひ、夫方をこしやてかた又はこしやてばらといつてゐる。ころはオモロでは殆ど勇士又は武士の義に用ゐられてゐるが、大を冠した場合もある。一の巻の三五は、八重山を征服した時の凱旋のオモロであるが、その中に「大ころた、ぢや國しちへ、國討ちしちへす(こそ)もどりよわれ。ゑぞ(大船)かす(敷即ち毎)ころたよ、島討ちしちへすもどりよわれ。みおうね(大御船)かすころたよ、戦てすもどりよれ。おほつぎめ(天つ國迄も)とよで(鳴響みて)、闘てすもどりよれ」といふ事がある。

この大ころは、古事記の次生三隱伎之三子島亦名三天之忍許呂別この忍許呂と比較すべきものであらう。本居翁は、「名の義は大の約りたるなり(中略)凡河内を大河内ともあり、これ大をおほしと云例なり、許呂は未だ思ひ得ず」といはれたが、この忍許呂はオモロの「大ころ」と同じものに違ひない。

さくらなみ

萬葉集では、さくらなみ(みと同義)ともいひ、小い波立ちの絶間なき貌を以て、間なくといふ語の枕詞に用ゐられてゐるが、混效験集には「さら浪、めよと浪、小浪の事也、さら波はさど浪と云ふ事か」とある。このさら浪はさくら浪の誤寫に違ひない。「おもろさうし」の十の巻の十四に、「しちよぎや鴻原に、まきしや鴻原に、さくらなみ立てば、めよとなみ立てば」といふのがある。めよとなみは夫婦浪で、今ではミートナミといつてゐる。岸によする小い浪が

重なり合ふところから得た名である。さ、いら、な、み、は、とうに死語になつたが、さ、い、な、み、は、今なほ琉歌で使はれてゐる。

ろ で

小網。萬葉集一に、「下つ瀬に小網さし渡し」とある。このさでは、後を狭く前を廣く箕の如き形に作つて、魚を掬ふ網で、この語は、私の知つてゐる限りでは、南島方言中、鬼界島に残つてゐる。三角形の袋狀を呈し、兩方に柄がついてゐる。

ち を ぞ る

さ 躍る。さは接頭語。跳躍する。踊躍する。萬葉集卷十九「檀の野にさ躍る雉子いちしるく音にしもなかむ隱妻かも。明の弘治年間、宮古島の酋長が、與那國島の鬼虎を征伐したいきさつを歌つた當時のアヤゴ中に「いくさばなほあらばなよ選び、大八重山ん下八重山んべやれ行けば、いくさみや(勝負)をほあらみやを爲せばど、あけず舞ひをはべら舞ひをさ躍り、前手んな百さるぎ倒せば、尻手んな百かなぎ倒せば、云々」とある。戦争の好機をとらへて、八重山へ侵入したら、忽ち戦端が開かれたので、まづ蜻蛉の舞、胡蝶の舞ひをさ躍つて、大手では百突きに突き倒し、搦手では百薙ぎに薙ぎ倒せば、といふほどの意で、「神麿きなば人はおのづから降参すべし」といふ、南島古來の信仰に

従つて、巫女等が陣頭に立つて、跳躍しつゝ呪咀した後、「大ころた」の呐喊した有様が、能く描寫されてゐる。

す  
す

命ずる。遣す。名ざしする。琉歌に「首里がなし御奉公取る人や多さ。必ずと里前御さし召しやうち」といふのがある。國王の御奉公は、何人も喜んでするものです、あなた、是非お使ひに行つていらつしやい、といふ意で、海外に使ひする役人の妻がよんだ歌である。今一つ「だんじよ嘉例吉や、選でさし召しやいる。船の綱取れば、風や眞鱸」といふのがある。ほんとに幸運の旅には、特に人を名ざしして、遣されることよ、船が纜を解くと、風は早や追手になつてゐる、といふほどの意である。このさしはオモロにも見されるが、悉くう(御)といふ接頭辭がついてゐる。十二の卷の劈頭に出てゐる、「稻之穂祭之時のおもろ」に「あまみきよがうさしよ、この大島下れたれ、ともくすへ、おぎやかもいすちよわれ。ほうばなとて、ぬきあへば、ちりさびはつけるな」といふのがある。アマミキヨ(開闢の神)の命令こそこの大島に下りたれ、尙眞王こそは千代にまませ、垂穂は色つきぬ、取りて獻けよ、塵土をな着けよ、の意である。

みそでやりかわちへ

萬葉集に、そでかふ(袖易ふ)といふ語がある。男女が契つて、變らぬしるし、後會ふ迄のかたみに、袖を切つてと  
りかはすの義で、衣を易へる事の簡略になつたものだといふ。卷四、「白細の袖解き更へて、」卷八、「白細の袖指し代へ  
てさ寝し夜や、」卷十一、「敷白の袖易へし子を忘れて念へや」。オモロにもそれに似た言表しがあるやうに思はれる。六  
の卷の六十四に、「やらのいふ崎に、やらの濱崎に、ゑ、島瀬瀬たみみ、國おやせ壘、上の押笠と、下の破れ笠と、み  
股うち交わちへ、み袖やり易わちへ、いみやは繩一つ、今は糸ふてつ、」といふオモロがある。一首の意は、屋良の磯  
崎で、ヤレヤレ、干瀬(珊瑚礁の水面)を壘の積りで、上の賤の男と下の賤の女とが、み股をうち交し、み袖をさし交し  
てゐる——もうはや纏れて、一筋の繩になつてゐる、といふことで、婿曳を歌つたものである。「み袖やりかわちへ」は、  
こゝでは袖さし交して、それを枕に共寝してゐる意だが、古くは袖を切つてとりかはす風習もあつて、「そでかへて」  
といふ言表しもあつたに違ひない。

す(しゆ、しよ、ぢよ)

琉球語が、原始日本語から分岐したことは、推測するに難くないが、そこにはなほいくつかの解きにくい謎が残さ  
れてゐる。萬葉時代には、「玉の緒」の説の如くには規則正しからずして、古今時代に至つて「玉の緒」の理想とする  
如くになつた、といふ用言の呼應法即ち係結をつくりの語法が、見出されるのは、その一例である。

琉球語の係結も、國語のそのやうに、ヤ、ガ、ヌ(の)を受けて、終止言で結ぶものと、du(そ)を受けて連體言で

結ぶものと、ス(こそ)を受けて已然言で結ぶものとの三種があつて、前二者は、今なほどの方言でも、規則正しく使はれてゐるが、後者はオモロにのみ遺つてゐて、四百年前の金石文にも見出すことが出来ない。こゝでは専ら後者について述べることにする。試みに、一二の例を擧げて見ると、「天てが下國したのかず大ぬしすよしらめ」きこゑ君がなし島襲しまてちよわれ、ゑぞこ(大船)通わぎやめ(通はんかぎり) あぢおそい(我君)しよ世知りよわれ(うしはき給へ)の如きものである。古今時代に至つて、規則正しくなつた係結と符を合すやうな語法が、オモロに現れたのは、一體どう説明したらいか。國語の搖籃期に手を別つたこの二つの姉妹語は、長い世代の間に、別々に發達を遂げたが、琉球語の環境も日本語のそれと略々似通つてゐるた爲に、發達の結果は偶然一致するやうになつたなど、と「偶然」を考へてよからうか。オモロの内容やその他の文獻によつて、平安朝から鎌倉・室町の二期にかけて、日琉の交通の頻繁であつたことがわかり、又琉球語中に、この二期の國語のかなり多く這入つてゐるのが見られるが、單語の借用ならまだしも、係結の如き語法の借用に至つては、單なる文化の交渉といふだけでは、説明することが出来まい。この説明には、或は大古に於て、琉球人の祖先が南島に移住したと同様な事が、中古以後にもあつて、さうした移住者の群れが、政治的社會的に勢力を得た結果、起つた現象だと假定するのも一方法であらう。といふのは、琉球史にも、又重なる島々の傳承にも、それがほの見えてゐるからだ。しかもこの係結は、首里及びうらおそひ(浦襲即ち國を治める所)のオモロに多く現れて、邊鄙な地方には、稀にしか現れないのも、注意すべきことである。それから、沖繩島の北部、本部もろぶの方言に、an kushe: yara (斯く)そあらめ)、 an kushe: im (斯く)そ言はめ)といふ言表しがあるが、もしこの kushe: が「うそ」の變形だとすれば「す」(そ)の前身はやはり「そ」といふことになるけれども、速断は出来ない。



或はこの語法は、詩人が國語から拜借したもので、韻文でのみ用ゐられて、口語では使はれなかつた、といふ疑ひも起つて來るが、しかし今日の口語中に、ダンヂユ、又はダンヂユカといふ副詞句があるところから考へると、文學の影響かも知れぬが、兎に角古くは口語でも使はれたことは、疑ふ餘地がない。オモロに、「首里杜城、ながえ(永久に)きよらおぐすく(美しき城ぞ)、だりじよ(實にこそ)また上下鳴響め」安富祖燒島よ、だりす(げにこそ)鳴響み聞かれ」といふのがあるが、他のオモロには、だに、す又はだもすとあるから、この「だに」は眞の義があつて、だりが「だに」の轉訛であることはいふまでもない。混效驗集に「す、言葉の結也。所により心替也。てるかは(日神)す世のむすびつけおろせ。さうすれかうすれといふ心か」とあり。又、だりしよ、だにごとを解して、「二つ共さればこそと云心」としてある。二百年前の辭書の編纂者も、この「す」「しよ」をこそと解したことがわかる。ダンヂユが「だにす」又は「だにじよ」の轉であることは、それで明白で、ダンヂユカはなるほど又は案の條といふ意に使はれてゐる。

二百年前に、初めて琉球語で戯曲(組踊)を作つた玉城朝薫は、其の執心鐘入(道成寺)の女主人公の詞中に、「約束の御行合やだにすまた爲ちやれ、袖の振合せど御縁さらめ」といつたやうに、この古い語法を用ゐたが、これは世の常のあひびきは、なるほどやつて見たけれども、かうして行きすりにあつて、陥つた戀こそは、何かの因縁であらう、といふ程の意である。この語法は短歌にも取入れられたが、「だんぢよ嘉例吉や選でさし召しやいる」とか、「名護の番所だんぢよ鳴響まれる」とかいつたやうに、連體言で結んでゐる。

序でに言ふが、この「だに」は誠にの義で、「けに」の同義語である。オモロの姉妹詩のくわい、い、に、やには、「だに賜れ、實に賜れ」と使はれてゐるが、その「に」の形式語であることはとうに忘れられて、オモロにも「これとだにの眞王や

れ（これこそ眞の王なれ）といつたやうに用ゐられ、戯曲にも、「御真人のまぎれ誠まことよ聞き留めれ（爾民衆よ能く聞け）といふ使ひ方がしてある。だが、「だ」が本體であることは、オモロに此島・御國・本國といふ意味の語に、だしま・だくに・だきよりがあるのでもわかる。この「だ」はたゞ「忠・唯」等と縁を引いた語であらう。そして、この「だに」は國語の助辭の「だに」と關係があるやうも思はれる。首里語では、實に意外だとか、人の意表に出づるとかいふことをダメンナランといふが、伊江島あたりの方言では、ダニンナラン（だにもならぬ即ち信）といつたやうに、古形が保存されてゐる。戯曲には、「おれこれよ言ちも、だにすらぬあらば（それ程まで言つても信用しなければ）」といふ使ひ方などもしてある。

たかびかり

萬葉集に、たかひかる（高光る）といふ枕詞があつて、天高く光る日とつづくやうになつてゐるが、琉球語では、これがかかびかり（√タカビチャイ）と名詞形になつて、今なほ使はれてゐる。これは太陽が天高く光ることにいひ、そのきら／＼として、まむきに見にくいことをミーフィチュルサ（ハメフィキヤルサ目映まはゆしの義）といふ。

たけ

萬葉集辭典に、「山を仰ぎ見て、高さの感じを主とする時に用ゐる。高嶺といふに同じ。嶽には必神が住んで居る。

その神性は人間とは多く直接關係は無いが、雨霧雲等を支配してゐる恐しいものである。嶽は遠く仰ぎ見るもので近づき難いものである。第二十、高千穂ノ嶽、第十三、三吉野の御釜ノ嶽」と見えてゐるが、琉語の「たけ」も殆ど同様である。たと異なるところは、琉球には山らしい山がないために、神の住んでゐる所は、藪でも「たけ」といつてゐることだ。「にらいの大ぬし」(常世の神)の足溜りで、後に聖地になつた「さやは嶽」も藪のやうな所である。封建時代には、「國々の按司部(諸侯)は皆祭るべき「たけ」をもつてゐるが、四百年前中央集權を斷行して間も無く、首里王府では、王城の東に高く聳へてゐる冕の嶽を祀つて、國中の「たけく、もりく」を統御させることにした。そのいきさつを刻んだ國王頌德碑(明の嘉靖二十二年)は、今なほ首里市のかたのはなに立つてゐるが、其の劈頭に「大りうきう國王尙清は、そんとんよりこのかた、二十一代の王の御位をつきめしよわちへ、天より王の御なをば天つぎの王にせとさづけめしよれちへ、御いわひ事かぎりなし、王がなしはむまれながらむかしいまの事をさとりめしよわちへ、天下をおさめめしよわちやる事、むかしもろこしのていわうぎようしゆんの御代にいたり、しかれば御たかべ(祀)めしよわるもありあり、だいら(内裏)よりひがしにあたりて、べんのたけといふ。これはきこゑ大ききみんくかみほとけの御あそびめしよわるところ云々」と見えてゐる。不淨があると、「たけく」は荒れるといはれてゐるが、それには「たけあれ」といつてゐる。「たけ」の同義語には「もり」(杜)があるが、これはあとで述べる。

## た　ち　ゆ　ん

立つの義から轉じて、往復する意になつたもの。チャー立ちは、立ちつとける義であるが、頻りに往復することの意にもなる。タトゥナ立チュン(立ちに立つ)は、督促などすることがあつて、頻繁に通つてゐるの義である。この語は行き馴らす、行きつけてゐるの義を有する國語の「たちならず」と比較すべきものであらう。萬葉卷九「葛節の井見れば立ちならし水をくみけむ互兒奈し思ほゆ。」卷十二「椿市の八十の衢に立ち馴らしむすびし紐を解かまく惜しも」

たがし、たがす

誰がし、しは強めていふ助辭、その物を確にさしていふ助辭、國語のたれし又は人しなければのしに似通つてゐる。しは、(si)と發音する場合もある。歌にのみ用ゐられる。たがしには、一體誰がまあといふ程の意がある。琉歌「たがすおとしゆたが驚ちやめわらべ二人手枕のねざどやすが。」すはまた「何が」につくこともある。同「のがすどく我に物を思はしゆが與所もながめゆる月どやすが。」この「のがす」には、どうしてまあわらの義がある。

なかいゆん

二人の間に立つて、互に感情を害ふことをいふの義。中傷する。譏誣する。最近、琉球の民謡「おほんしやり節」の原形が、竹柏園珍藏の琉歌集中から發見された結果、今までのに缺けてゐた初めの六句がわかつて、琉球歌謡の研

究に光を投じたが、煩を厭はず左に其の全文を引用して見よう。誰のまゝで新里が、な、か、言、ち、こ、ひ、た、が、な、か、い、よ、す、ど、あ、ま、る。は、た、い、よ、す、ど、あ、ま、る。誰、す、ぎ、や、ん、し、へ、ん、聞、き、み、し、や、う、れ、里、前、隣、の、耳、切、り、鼻、切、り、ぐ、ね、引、き、宮、が、目、は、け、こ、べ、き、り、お、え、ん、き、ゆ、の、(こ、に、?)、あ、ら、か、ち、こ、わ、り、て、あ、べ、ら、ち、を、ら、ば、け、と、の、が、ち、思、い、り、や、里、一、人、だ、う。あ、り、が、も、の、い、く、ら、し、や、や、の、に、た、め、(て、?)、る、が、は、い、ほ、だ、の、が、れ、る、い、こ、れ、を、譯、し、て、見、る、と、何、處、の、饑、舌、奴、が、蔭、口、を、し、て、廻、つ、た、か、し、ら、蔭、口、を、す、る、な、ん、て、あ、ん、ま、り、だ、わ、ほ、ん、と、に、餘、計、な、こ、と、だ、で、も、誰、が、聞、い、た、つ、て、か、ま、ひ、や、し、な、い、ネ、エ、貴、方、ま、あ、お、聞、き、な、さ、い、ま、せ、「お、隣、の、耳、の、切、れ、た、鼻、の、缺、け、た、窠、を、引、いた、猫、奴、が、目、の、爛、れ、た、首、の、廻、り、の、毛、の、剥、け、た、鼠、に、不、恰、好、な、太、い、首、筋、を、く、は、へ、ら、れ、た、つ、て、そ、し、て、猫、奴、は、悲、鳴、を、あ、け、て、ば、た、く、し、た、つ、て、さ、あ、ら、この、人、は、こ、ん、な、面、白、い、話、を、聞、か、さ、れ、て、も、た、ど、一、人、で、考、へ、込、ん、で、い、ら、つ、し、や、る、口、の、中、で、物、を、言、つ、て、何、で、す、その、ま、は、妾、は、危、く、騙、さ、れ、る、と、こ、ろ、だ、つ、た、と、い、ふ、事、に、な、る。夫、の、秘、密、を、嗅、き、つ、け、て、妻、が、皮、肉、を、言、つ、て、る、こ、と、を、描、寫、し、た、三、百、年、前、の、民、謡、で、その、原、形、が、わ、か、つ、た、お、蔭、で、古、琉、球、語、の、疑、義、の、解、け、た、の、も、あ、る、が、く、は、し、い、説、明、は、後、日、に、譲、り、こゝ、で、は、「な、か、い、ゆ、ん」と、い、ふ、語、に、つ、い、て、今、少、し、附、加、へ、て、置、か、う。

この語は、今では耳遠くなつてゐるが、國語の「なかがと」(聞言)と縁を引いてゐる語であらう。萬葉卷四、「汝を」と吾を人ぞ離くなるいで吾君人の中言聞きこすなゆめ。同、「けだしくも人の中言聞けるかもこゝだく待てど君が來まされぬ。」琉球の俚諺に、「夫婦の仲や言の者がど側なゆる」といふのがあるが、「夫婦喧嘩は犬も喰はぬ」と略々同じ意味をもつてゐる。

與へられた頁數の都合で、一先つ切上げて、あとは雜誌「方言」で發表することにしたい。



昭和八年六月五日印刷  
昭和八年六月十日發行

萬葉集講座 第三卷

言語研究篇(奥附)

〔非賣品〕

編輯者

東京市日本橋區通三丁目八番地  
和田利彦

印刷者

東京市本郷區眞砂町三十六番地  
龜谷良一

印刷所

東京市本郷區眞砂町三十六番地  
日東印刷株式會社

發行所

東京市日本橋區通三丁目八番地

春陽堂

電話 日本橋五一・六四一・三七八八  
振替口座 東京 一六一七番